神が消えた日

ユースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神が消えた日

【Ｎコード】
Ｎ２８９３Ｙ

【作者名】
ユースケ

【あらすじ】
時代は古代。
日本は神の声が聞こえる不思議な女性「卑弥呼（ひみこ）」の国、邪馬台国をはじめとした国々が列挙していた。
そんな時代に生まれた、もう一人の神の声を聞く力を持つ少女「台与（と よ）」

幼いころからその力を見出された台与は卑弥呼の下で修業の日々を送ることになる。

しかし、ある事件をきっかけに台与の人生は大きく変わることになる。

プロローグ（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

また、表現が微妙に違うＲ－１８版も公開しています。

プロローグ

誰もいない高台。山の中腹にあるそこは、里を一望できるこの場所が私のお気に入りの場所だった。特別きれいな景色を見ることができるということもある。しかし、何より私が気に入っていたのはここには誰もこないからだ。

ここにいれば私は一人だ。誰も私を恐れない。少なくとも、怯えている人を見ることはない。それだけで私は十分だった。

私にはどうやら特別な力があるらしい。普通の人には聞こえない声を聞くことができる。簡単に言えば神様の声を聞くことができるのが私の力らしい。それを嬉しく思ったことは一度もない。むしろ憎たらしかった。

この力のせいで里の人たちは私を奇異な目で見る。敬う人もいれば、露骨に嫌な目で見る人もいる。しかし、全ての人に共通することがある。皆、私を恐れている。

当然のことだ。人は得体のしれないものを恐れる。例えそれが神の声が聞こえるという高尚なものでも関係ない。皆、私を恐れて避ける。おかげで友達もできない。普通、私くらいの年齢の子供なら野原で友達と遊び回るのが普通なのだろう。しかし、私にはそんなことなど許されなかった。最初は寂しかった。何で私だけと思ったこともあった。しかし、今はそんなことを考えることもない。一人でいることに私は慣れすぎていた。

日が沈み始め、夕焼けが私を照らす。山々の間に沈んでいく橙色の太陽を里の人たちは綺麗だと言う。しかし、私はそれが憎い。一人

でいる時間が終わる知らせだからだ。

日が沈むと里に帰れなくなる。それを避けるためにも私は夕焼けとともに帰らなくてはいけない。私はため息をつき、夕焼けに背を向けた。その時だった。一人の女性が木の木陰から私を見ていたことに気付いたのは。

「何してるの？」

そう訊ねると、女性は苦笑しながら木陰から出てくる。腰まである長い黒髪に、スッと整った顔立ち。子供の私から見ても綺麗な人だと思わせる顔立ちをしていた。そして何より目を引いたのは女性の服だ。巫女服と呼ばれるそれは、私もよく着せられる服だ。里の人たちが言うには神聖な服らしい。そのことから、女性が特別な人なのだと私は感じた。

「ゴメンなさい。一人の時間を邪魔して失礼だったかしら？」

「いいよ。どうせもう帰るとこだったし。」

「じゃあ、一緒に帰りましょうか？」

そう言って女性はニコニコと笑う。その反応に私は驚く。やはり特別な人なんだ。そう思い、私は女性をジロジロと見つめる。

「どうしたの？何か私の顔についてる？」

不思議そうに女性は首をかしげる。

「私が怖くないの？」

警戒しながら私は言う。しかし、女性はニコッとした笑顔を私に向けて言った。

「全然。」

当たり前のことのように女性は言ってのける。しかし、私はそれが信じられなかった。

「嘘だ。」

「どうして？」

「だって私は変な子で、変な声も聞こえるし・・・」

「何でそれが怖いの？素敵じゃない。」

「え？」

女性の言葉を私は信じられなかった。私の得体のしれない能力を女性は素敵と言った。怖がられるだけだった私の能力をただ一言、素敵と。聞きなれないその言葉に、私は何も返すことができなかった。

「それにね、これから私たち一緒に暮らすのよ。怖いなんて思う相手と一緒に住むと思う？」

その言葉の意味を私はすぐに理解できなかった。かろうじて一緒に暮らすという意味を理解した時、女性は既に私の手を握っていた。

「私の名前は卑弥呼。あなたの名前は？」

ニコッとした笑顔で卑弥呼は訊ねる。その笑顔に私は逃げ道を失ってしまった。

「台与。」

これ以上笑顔を見るのが恥ずかしく、私は目を背けながら答える。

すると、卑弥呼はクスリと笑って私の頭を撫でた。それがくすぐったくて私は手を払いのける。そうしているうちに、卑弥呼と目が合う。

「よろしくね、台与ちゃん。」

そう言って笑う卑弥呼。その笑顔が眩しくて、私は目を逸らした。

これが、私こと台与と卑弥呼の最初の出会い。そして、全ての始まりだった。

プロローグ（後書き）

このたびは、私の小説を読んでいただきありがとうございます。

時は古代。邪馬台国からヤマトへ繋がる歴史を駆け抜けた女性、台与がこの物語のモデルとなっています。

歴史的にはおかしい表現も多々ありますが、どうか長い目で呼んであげてください。

静かな日々（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

また、表現が微妙に違うＲ－１８版も公開しています。

静かな日々

山の中腹にある岩場。まるで里を見下ろす高台のように出っ張ったそこが彼女のお気に入りの場所だった。昔は人から離れたくて高い場所へ登ったものだ。その名残か、彼女は今でも暇があればこうした里から浮きでた場所へと足を運ぶ。

もはや彼女にとってこれは習慣みたいなものだった。こうすることで、気持ちが穏やかになるのだ。

岩場の先端に座り、足を投げ出す。支えを失い自由になった足が解放感を与え自分の体を軽くする。そんな心地よい感覚を味わいながら、彼女はそこから見渡せる里を眺めていた。

「台与。そこにいるのか？」

男の声がして彼女は振り返る。台与。それが彼女の名前だった。

「何か用？私、忙しいんだけど。」

「とてもそうには見えないけどな。」

苦笑しながら男は台与の隣に座る。短すぎず長すぎない髪を蓄えた

その姿は青年と形容するにふさわしい。このところたくましさを増している彼を台与はじっと見つめた。

依人（よりと）。それが彼の名前だった。台与がこの里に来てからずっと傍にいる幼馴染のような相手だ。そんな依人と台与もお互い十七歳になった。嫌でも異性と感じてしまうことがここ何年も続いている。

「ん？何か俺の顔についてるか？」

「別に。で、何の用なのよ？」

惚けた顔で言う依人からそっぽを向いて台与は言った。

「卑弥呼様が呼んでる。お前、また祭事を抜け出しただろ？」

「だって面倒だし」

一気に込み上げてきた気だるさに台与はため息をつく。祭事。神に祈りを捧げて稲作や工事などの無事を祈る行事だ。台与の師である卑弥呼は多くの地域の祭事を取り仕切る巫女だ。当然弟子である台与もその役目を継ぐための勉強をしなくてはならず、卑弥呼の行う祭事には助手として参加するように言われていた。

「まぁ、私が行かなくても師匠が全部やるでしょ」

「いやいや、お前が行かないと俺が後でお叱りを受けるんだが」

「別にいいでしょ。私がいつもとは違う場所にいたとかで見つからなかったとかにしとけば。少なくとも私は怒られない。」

「俺は怒られんだよ。ほら、行くぞ。」

「ちょ、女の子の腕を気軽に引っ張んな。」

強引に腕を引っ張られ、台与は嫌々立ち上がる。すると、解放されていた足が突然岩場に立ったせいか、その場で台与はよろめいて依人の胸にボンと倒れこんでしまった。

「おいおい、大丈夫か？」

心配そうに覗き込む依人。しかし台与はそれにまともに返事ができなかった。顔が一気にカッと熱くなるのを感じると、次の瞬間には反射的に依人の体を強引に突き飛ばしていた。

「う、うるさい！さっさと行くわよ！」

顔だけでなく胸の鼓動も速まっている。それを隠すように台与は叫ぶと、そのまま山を下り始めた。

静かな日々（後書き）

2話です。依人はもう一人の主人公と考えてくれればいいです。

この調子で毎日更新していきます。

卑弥呼（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

卑弥呼

「あら台与ちゃん。遅かったわね」

台与の住む里から少し離れた里。そこで台与と宿禰を迎えたのは既に片づけが終わりつつある祭事場と、師である卑弥呼の笑顔だった。

「あ、俺、部隊長に報告してこないと。」

「こら、待ちなさいよ。」

逃げ出そうとする宿禰を台与は呼び止めようとする。それを「台与ちゃん。」と卑弥呼は呼び止めた。

「えっと、何ですか師匠?」

「明日の天気は?」

ニコニコと笑いながら卑弥呼は言う。その意図を台与はすぐに理解した。

「明日は一日中晴れですね。収穫祭まで大きな雨は降らず、今年も無事に終わりそうです。」

「よろしい。でも惜しいわね。その収穫祭に参加すべき人数。市に持って行く量まではわからなかったかしら？」

「さすがにそこまでは・・・」

そう言うと、卑弥呼は残念そうにため息をついた。

「私の部屋に正確な数や他にお告げを受けたことをまとめた書があるから、後で弟に渡しておいてね。」

そう言って卑弥呼は笑うと、里へ向けて歩き出した。台与は一つ頷くとその背中を追いかけた。

卑弥呼。邪馬台国の女王であり台与の師匠でもある女性だ。幼い台与を引き取り育ててくれた卑弥呼は台与にとっては親のようなものでもあった。その優しい性格に美しい容姿。そして未来を見る能力に加え、祭事での指揮する力。人を引き付ける力。すべてにおいて上の卑弥呼は台与にとって超えるべき壁でもあった。

その後ろ姿は台与にとって大きく、そして神聖だ。後ろ姿が神聖なのは巫女服のためだけではない。一つ一つの挙動、言葉づかい。それらが全て合わさった神聖な風格。邪馬台国の女王に祭り上げられ

るのも容易に納得できた。

「ねぇ台与ちゃん。台与ちゃんは才能があるのに、どうして神様の言葉を熱心に聞こうとしないのかしら？」

突然卑弥呼が台与に振り返り訊ねる。その質問は台与の胸の奥にずしりと響いた。

「やだなぁ師匠。私、これでも全力ですよ。早く師匠に追い付きたくて努力してるんですから。」

慌てて台与はそう返す。しかし、取り繕ったその言葉は簡単に卑弥呼に見透かされていた。

「嘘ね。台与ちゃんには才能があるのは確かだもの。これは神様のお告げにもある真実よ。だけど、台与ちゃんは全くその力を生かそうとはしない。ましてや依人君と一緒に兵の真似事ばかり。台与ちゃん、私たちの役目は本来・・・」

「『神様の声を聞き、それを正確に伝えて、人々の繁栄を促進すること』ですよね？」

卑弥呼の言葉を遮って台与は言う。卑弥呼の言いたいことはわかっ

ていた。神様の声を聞くこと。これが本来台与に備わっていた力だった。しかし、台与はその力をここ何年使おうとしなかった。依人と一緒に剣の稽古や乗馬の訓練をすることが楽しく、性に合っていたこともある。しかし、それ以上に台与は卑弥呼にも言ったことのない疑問から修行を止めていた。

「ねぇ台与ちゃん。どうして台与ちゃんは自分の役目を果たそうとしないのかな？教えてくれないかな？」

優しげに訊ねる卑弥呼。しかしその目は真剣だ。いつもの中途半端な答えなど許してくれないだろう。そう思わせるものがあった。こうなったら台与に逃げ道はない。一つ息を吐き、台与は決意を固めた。

「師匠。本当に神様の声を皆に伝え、皆をその通りに動かすことが皆の幸せなんでしょうか？」

「どういうこと？」

「私、最近思うんです。私たちがやっていることは、結局幸せの押しつけじゃないのかなって。」

それは台与がずっと抱いていた疑問だった。この国は卑弥呼を通して神の言葉を聞き、皆がその通りに動いている。作物の種まきや収

穫時期から外交の手法まで。さらには国民一人一人の人生までもだ。住む場所や畑の位置。結婚相手やその職業までも神のお告げで決められる。もちろん不満の声はある。しかし、結局皆は表立って反発しない。なぜならお告げの結果、上手くいっているからだ。

しかし、果たしてそれは幸せなのだろうかと台与は疑問に思っていた。それは押しつけではないのか。そう考えた時から台与は自らの役割を果たすことに躊躇いを覚え始めていた。

「おかしなことを聞くのね。」

しかし、そんな台与の思いとは裏腹に卑弥呼はクスリと笑った。

「お告げのおかげで皆が最善の選択が出来ている。その証拠に邪馬台国は飢饉も戦乱も最小限に抑えられてきたわ。周りの国が戦争に明け暮れている中で、これは誇るべきことだと思うわ。」

そう言って卑弥呼は誇らしげに空を見上げて背を伸ばす。

「台与ちゃんはどうしたいの？間違った方向に進む人たちをそのままにしておいて、悲しい結末を迎えることななってもいいと言うの？」

「それは・・・」

「ね、反論できないでしょ。確かに今の台与ちゃんみたいに疑問を思うことがあるかもしれない。だけど、こうして平和が続いているのも明らかな事実。それを否定できないのなら、今は自分のやるべきことをしっかりやりなさいな。」

そう言った卑弥呼の目は普段の優しいものではなかった。有無を言わさないその表情。台与はもう反論の言葉を失っていた。

「さ、帰りましょ。帰ったらおいしい晩御飯が待ってるわよ。」

いつもの笑顔に戻り卑弥呼は歩き始める。台与はもうそれに黙って従うしかなかった。

卑弥呼（後書き）

続きは明日更新

二人の疑問（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

二人の疑問

「ねぇ依人。私、間違ってるのかな？」

いつもの岩場。卑弥呼と話をした日から一夜が明け、台与と依人の二人はいつものように岩場に足を運んでいた。

「さぁな。俺は台与や卑弥呼様みたいに特別な力ねぇからよくわかんねぇや。」

台与から少し離れた場所で剣を振りながら依人は答える。その態度にムカッとした台与は黙って足元に落ちていた小石を依人に投げつけた。それは一直線に依人へ向かい、その頭に激突する。

「痛っ。何すんだよ。」

「真面目に答えないからよ。」

頭を押さえて抗議する依人。それに向けて台与はもう一度小石を投げつけた。しかし今度は依人も黙っていない。その小石を持っていた剣で弾いて、一気に台与との距離を縮めると、その喉元に剣を当ててみせた。

「女の子に剣を向けるとか最低ね。」

「悪いけど、俺は人に向けて変なモン飛ばしてくる奴を女とは思ってないんでね。」

フンと笑い依人は剣をしまう。そしてそのまま台与の傍に座るとフウとため息をついた。

「台与の考え、わかるよ。確かに俺たちは幸せを押しつけられてる。それは間違ってるのかもしれない。」

いつになく真面目な顔で依人は言う。その以外な態度に台与は驚く。

「だけどな、結局あの人のお告げのおかげで俺たちが安定した生活を送っていられてるのも事実なんだよ。だから、俺はあの人を否定できない。」

そう言って依人はその場に寝転がった。どこか悔しそうに空を見上げる依人。その理由を台与は知っていた。

そもそも、台与が神のお告げに疑問を持ち始めたのは依人が原因なのだ。依人は今でこそ軍で働き、この若さで頭角を出すほどになったが、本来は漁師になりたがっていた。しかしお告げで軍に入隊す

ることに決まり、依人は漁師の道を諦めなければならなくなった。軍に入隊する前日まで里を抜け出そうとしていた依人。その姿を見て台与はお告げに疑問を持ったのだった。

「やっぱり後悔してるの？」

思い切って台与は依人に訊ねる。すると依人は表情を変えずに頷いた。

「後悔してる。だけど同時に納得もしてるんだ。俺は軍人としてやってた方が偉くなった。最近じゃそう思ってる。」

そのあとに依人は「でも」と繋げ、起き上った。

「夢を追えないってのは辛いな。」

そう言って苦笑する依人。その表情は悲しそうで、台与は言葉をかけることができなくなった。

気まずい沈黙が流れる。依人は何も話さない。台与もどう話を切り出していいのかわからない。二人の間を風だけが通り抜ける。なんとも言えない沈黙が二人の間に広がっていた。

「あぁもう。やめたやめた。」

頭をくしゃくしゃと掻いて突然依人は叫ぶ。

「やめようぜ、こんな話。なんかいつまでも答え出ない気がするぞ。」

「それもそっか。」

台与もため息をついて依人に賛同する。何が幸せなのか、個人が考えても仕方ない。人それぞれに幸せがある。そのことがわからないほど台与も愚かではない。結局、この問題の答えはすぐに出るものではない。台与はそう自分の中で結論づけた。

「そういえば、台与は明日予定とかないのか？」

唐突に何か思い出したように依人は言う。

「ないけど、どうかした？」

「明日、大牟田国まで行くんだけど一緒に行くか？」

「あぁ。命（ミコト）のとこか。」

大牟田国。そして命。その単語がやけに懐かしく感じた。命。依人と同じく台与の幼いころからの友人だ。大牟田国の長の一人娘である命は台与の唯一の同性の友人であると同時に、依人について話せる唯一の存在だった。病弱であまり外には出られないものの、笑顔のかわいい女の子だ。

「そ、命のとこ。明日、ちょっと向こうへ買い出しに行く用事あってさ。」

「まぁ、大牟田国なら大丈夫でしょ。師匠も反対はしないだろうし、ちょっと命の顔を見に行くのも悪くないわね。」

命の顔が浮かぶ。体の弱さなど感じさせない笑顔。それを見に行くのも悪くない。

「じゃ決まりだな。明日の朝、迎えに行くから。」

「あら、馬車でお迎えでもしてくれるの？」

「ばーか。馬車なんてのは命みたいなお淑やかな女が乗るもんだ。

お前みたいなのは自分で馬に乗りな。」

そう言って依人はイシシとからかうように笑う。分かってはいたものの、こうも女扱いされないのは腹立たしいものだ。ムッとした台与は依人の頭をベシンと叩いた。

「おぉ怖い怖い。」

依人は悪びれることなくそう言って、逃げるように走り去っていった。その振舞いがさらに台与をイラつかせる。

「待て！この馬鹿！」

逃げる依人の背中のそう怒鳴りつけ、台与もその後を追った。

二人の疑問（後書き）

次回は明日掲載です

出発（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

出発

「お、早いな。」

「依人が遅いだけよ。」

二頭の馬を引いてやって来た依人。二頭確保するのに時間がかかったのか、予定よりも少し遅れて依人は待ち合わせ場所に到着した。

「悪い悪い。とりあえず乗れよ。時間押してんだ。」

「誰のせいよ。」

急かされるがままに台与は依人の連れてきた馬のうちの一頭にまたがる。不安定な独特の感覚が体を揺さぶり、台与は手綱を引いて馬を落ち着かせて安定を保つ。その様子を依人はじっと見つめていた。

「何よ？」

「いや、やっぱお前もったいないよ。軍でもそこまで簡単に馬を扱える奴は少ないってのによ。」

実際その通りだった。つい最近使われるようになった馬を乗りこなせる人間は少ない。依人の言う通り軍でも馬をこうして扱える人間は多くない。それでも台与は乗りこなせた。

「ま、これでもかなり練習したからね。」

別に特別な力云々ではない。これだけは自分の努力の成果だという自負が台与にはある。依人が乗りこなせるようになったと聞いて、修行そっちのけで練習したものだ。おかげで、今は軍の人間以外では少ない馬の乗り手。しかも女ではただ一人の乗り手になっていた。

「しかし何だ。お前、ホントに卑弥呼様の弟子かよ。」

「何よそれ。」

呆れたように言う依人に台与はムッとして答えた。

「普通、卑弥呼様ほどのお偉いさんの弟子なら、もっと上品でこんなお転婆なことしないだろうが。それこそ命みたいにお淑やかで気品があって。」

依人が身振り手振りを踏まえながら熱心に語る。どこか自分が非難

されているようで台与からすれば面白くない。

「へぇ、依人ってそういう女の子が好みなんだ。」

悪戯っぽくそう言うと、依人はブッと吹き出して「馬鹿、そんなんじゃねぇよ。」と言う。

「どうだか。」

わざと台与は拗ねたような素振りを見せてみる。こんな態度を見せれば依人はどういう反応をするだろうか。それを考えると何故かドキドキしてきた。

「まぁ、お前みたいに活発な子も悪くないと思うけどよ。実際、一緒にいて飽きないし。」

「うわ、もしかして口説いてるの？」

「ねぇよ、馬鹿。」

実際、自分でも馬鹿だと思っていた。何の気ない会話で感情が浮き沈みしていることなど、台与は経験したことなどなかった。それな

のに、依人が自分のような女の子を悪くないと言ったことを台与は嬉しく思ってしまった。それと同時に自分を口説いてるのかという問いに依人が即否定したことがショックでもあった。

「ったく、あんま無駄話してると向こうに付いたら夜になるな。」

「うん。」

「『うん』じゃねぇだろ。ほら、行くぞ。」

依人が馬を走らせたことでようやく台与は自分が上の空だったことに気付いた。本当に、突然どうしてしまったのだろうか。自分でもわからなかった。

「ええぃ、しっかりしろ台与。」

自分にそう言い聞かせ、台与は依人の後を追うように馬を走らせる。乗り心地がいいとはお世辞にも言えない振動と、走るほど向かってくる追い風。それを相手のしているうちに台与のモヤモヤした感情も流されていった。

出発（後書き）

次回は明日更新

大牟田国にて（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

大牟田国にて

邪馬台国。卑弥呼の統治している国はそう呼ばれている。しかし、その大層な名前の割に規模はさほど大きくない。むしろ周辺諸国と比べると小さいくらいだ。しかし、そんな邪馬台国の女王卑弥呼は規模に似合わず大きな影響力を持っている。それは彼女の持つ予言の力、そして周辺諸国の関係が大きく起因している。

数年前、このあたり一帯の国々の間では戦争が盛んだった。度重なる戦乱。人々の心は疲弊し切っていた。そんな国々を結びつけたのが卑弥呼だった。卑弥呼は自身の予言の力で次々に国を説得。停戦にこじつけ、恒久的な平和条約まで締結させた。その功績と力から、卑弥呼は絶対的な存在として諸国から崇められているのだ。そして、ここ大牟田国もそんな卑弥呼を崇める国の一つだった。

「相変わらずここは賑やかだなぁ。」

感心したように依人は言う。活気に満ちた市場。物々交換のための競りが行われているそこは怒号も時折入り混じる。それが何軒も連なっているここは賑やかという範疇を通り越すほどだった。

「まぁ当然でしょ。大牟田国は商業の中心。このくらい活気がある方がいいってものよ。」

台与の言葉に「まぁな。」と依人は相槌を打つ。

大牟田国。商業の中心であるここは多くの国の物が集まる。同時にここは保護区となっており、商売を専門とする人間たちの自治区だ。まだ戦乱が盛んだったころからもこの独立は守られ、一種の平和の象徴とも言える国だった。

「そういえば依人。あんた何も持ってないけど、そんなんでどうするの？」

ここまで手ぶらで来ていた依人に台与は訊ねる。馬は馴染みの店が預かってくれているものの、買い出しとなれば話は別だ。物々交換が原則のここではこちらも何か持っていないと買い出しなど出来ない。しかし、依人は完全な手ぶらだ。これでは何も買えるわけはなかった。

「あぁ、先に物は渡してんだ。今回はそれを取りに行くだけ。」

「ふぅん。」

つまりは信用取引というわけか。珍しいことではない。季節物の取引などでは物が揃わないことがある。そのため、あらかじめこちらが物を渡し、後に受け取る。お互いに信用がないと成り立たない取引だが、最近では活発に行われる取引だ。

「まぁ、量が量だけに少し時間がかかるかもな。」

「へぇ、そんなに交換に出したんだ？」

「まぁ、隊のみんなの分だからな。帰りは荷車でも借りないとキツイな。」

ため息をついて依人は服から木の札を取り出す。取引に使うための交換札。ヒョコっと台与は覗いて見た。

「うわぁ、確かに結構な量だね。」

「だろ？」

札に書かれていたのは取引の品だ。ざっと見ただけで普段扱う品数の倍以上ある。

「これを2人ってのも酷な話だよねぇ。」

「だよな。ホントは何人か来るハズだったのにアイツら・・・」

「ん？どうかしたの？」

「いや、何でもない。」

ため息混じりのそう言うと、依人は頭を掻いた。

「とりあえず、俺は今から取引相手に会ってくるから、お前は先に命のとこに行っててくれ。俺も用事終わったらすぐに行くから。」

「いやいや、あの量を一人じゃ大変でしょ。私も手伝うって。」

「大丈夫。別にすぐ取引するわけじゃないからな。荷物受け取るのは明日。今日はそれの打ち合わせだ。」

「あ、そっか。」

あの量だ。確かに行ってすぐに交換というわけにもいかないのだろう。なら、行く意味はないか。台与はそう判断すると「うん」と頷いた。

「じゃ、先に命のとこ行ってるから。せいぜい頑張って来なさいな。」

「はいはい。頑張って仕事してきますよっと。」

ため息をついて依人は市場の奥に向かって歩き出す。その姿を見送り、台与も人ごみの中へ歩きだした。

大牟田国にて（後書き）

次回は明日更新

大牟田国にて（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

大牟田国にて

大牟田国。商業の中心であり、商人たちの自治区であるそこを束ねる長もやはり存在する。その家は市場から少し離れた住居区の中心にあり、他の家よりも大きな佇まいの屋敷。それが長の家だった。

「止まれ。」

その門にはいかつい風貌の門番が立っている。その男はフラリと門に近づいた台与を不審に思ったようで、槍を持って脅すような低い声で台与を止めた。

「何用だ？」

無愛想に睨みつけたまま男は言う。

―やれやれ、新しい人か・・・

ため息をついて台与は苦笑する。いつもの門番ならほぼ顔パスだが、どうやらこの門番は新しい人らしい。顔が通じる相手以外から見れば台与などただの小娘だ。この門番のように不審がるのも無理はない。

しかし、理解はしていても面倒なものだ。やれやれと台与は一つため息をつくと、スッと男の顔を睨みつけた。

「『台与』が来た。そうここの主に伝えてくれないかしら？」

予期せぬ言葉だったのか、その言葉に門番の顔が驚きに満ちる。しかし、すぐに表情を戻すと再び疑いの目を台与に向けた。

「台与様という証明は？」

「ないわよそんなの。」

「ならば通すわけにはいかん。」

門番も譲らない。こうなると厄介だ。自分が台与である証明など持っているハズがない。それに、一応は卑弥呼の弟子として名の通っている台与だ。それが一人でフラリと訪ねてくるなど傍から見れば怪しいことこの上ない。それ相応の訪ね方をすると思われいてもおかしくないし、こんなに気軽に訪ねてくる方が怪しいというものだ。

「お願い。話してくれたらわかるからさ。ここは信じてくれないかな。」

「ダメだ。ほら、今なら見逃してやるから、さっさと帰りな。」

「ケチ。」

「ケチで結構。」

こうなれば何を言っても無駄だ。ここまで怪しまれれば打つ手がない。どうしたものかと台与が困り果てていると、屋敷の奥から髭を蓄えた男が出て来た。

「騒がしいな。何事だ?」

「はっ。それが・・・」

その男は門番よりも一回り小さく、体つきも門番に比べると細い。しかし、その目つきは鋭く、感じる威圧感は門番のそれよりも遥かに大きかった。大物。一言で表すならその言葉が一番適切だろう。そんな男の目がギロリと台与を見つめた。

「ど、ども。」

苦笑して台与は会釈する。その瞬間、男の目がカッと見開いた。

「おい、お前。」

男は門番を振り返り肩を掴む。低い、威圧感を帯びた声。門番はなぜ自分がそんなことを言われたのかわからないのか、「は？」と惚けた声で返事をする。その瞬間、男はギロッと門番を睨みつけた。

「馬鹿野郎！この方は台与様だ！無礼なマネしたんじゃないだろうな！」

「も、申し訳ありません！」

門番は直立不動になり頭を下げる。巨体がくの字になり自分よりも小さな相手に頭を下げているのは、見ていてどこか可哀そうに思えてくる。

―謝られても困るんだけどなぁ・・・

台与は苦笑する。面倒だったのは確かだが、ここまでして欲しいとは思っていない。逆に謝られているこちらが悪者にまで思えてきた。

「台与様、申し訳ありません。この者には後でキツく言っておきま

すので。」

そう言って男も頭を下げる。

「いやいや、いいですよ別に。むしろ心強いです。ここまで強固な門番ならいかなる侵入者をも防いでくれるでしょう。」

「も、勿体なきお言葉！」

そう言うと、門番は一層深く頭を下げる。先ほどまでの堂々とした態度はそこにない。一段と小さく見えた門番。しかし門番がそこまで頭を下げる理由もわからなくはなかった。

「あ、今のは予言とかじゃないから。私個人の感想。あなたがここの強固な門番になれるかどうかはあなたの努力次第ってことで。」

そう付け加え、台与は微笑む。そう。卑弥呼の弟子である台与の一言は重いのだ。台与が意図せずともそれは予言と捉えられ、人はそれが決まった未来であるように思ってしまう。だからこそ、この門番の反応も理解できなくはなかった。

「して台与様。今日はどういったご用事で？」

「あ、そうだった。命いますか？」

「娘ですか。それなら今連れて来ましょう。」

「あぁ、大丈夫です。私が行きますよ。」

そう言うと、男は「申し訳ありません、娘のために」とペコりと頭を下げる。

そう。この男こそ命の父親。そしてここ大牟田国の長だった。

「あ、あとで依人も来ますんでよろしくお願いします。」

「依人殿もですか。ならば今日はお泊りになるおつもりで？」

「そうですけど、もしかして都合悪いですか？」

「いえいえ、台与様がお泊りになるとは光栄なこと。どうぞごゆっくり。」

そう言って長は再び頭を下げる。それに軽く会釈し、台与は屋敷の門をくぐった。

大牟田国にて（後書き）

次回は今日の夜中更新します

命（ミコト）（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

命（ミコト）

「おじゃましますっと。」

さすが長の家と言うべきか、屋敷の大きさは邪馬台国の本殿に近いものがある。広々とした部屋が用途に分けていくつも並ぶ。一般の家が一つしか部屋がないことを考えると、それはまさに権力の象徴と言っても過言ではない。そんないくつもの部屋の一番奥。そこが命の部屋だった。

「命、入るわよ。」

「え？台与ちゃん？」

「そ、遊びに来ちゃった。入っていい？」

「えっと。依人くんは・・・」

小さな命の声が中から聞こえる。依人に見られたら困るものでもあるのか、その声はどこか恥ずかしさも混じっているように思えた。

「アイツなら今買い物中。だから別に命が裸でも何しててもー・・・」

「は、裸じゃないよ！」

抗議するような命の声。顔は見えなくてもその顔が真っ赤になっているのが想像できるくらい単純な反応。やはりからかいがある。台与は可笑しくなってニヤニヤと笑った。

「はいはい。じゃあ今依人に見せられないような格好の命さん。そろそろ部屋に入れてくれませんか？」

「むぅ・・・そういうこと言う。」

「拗ねない拗ねない。ほら、開けるわよ。」

拗ねたように言う命などお構いなしに台与は扉を開ける。そこにいたのは当然裸の命ではない。長い黒髪に美しい衣を着た少女。台与に比べてよっぽど姫という肩書が似合うであろうその風貌がそこにあった。

「久しぶり、命。」

「久しぶり、台与ちゃん。」

そう言って命は微笑む。相変わらずの品のいい笑顔。依人が言うのも無理もない。本当に美人というべき少女が命なのだ。

「どう、体の調子は？」

「うん。最近は結構落ち着いてるんだ。普通に歩けるし、外へ出ても平気。」

「へぇ。じゃ、来週の収穫祭には来れるんだ？」

「そうだね。この調子ならお父様も許してくれると思う。」

命は二コリと笑う。収穫祭。それは邪馬台国最大のお祭り行事だ。一年の収穫を神に感謝するという行事。卑弥呼が主催するそのお祭りは毎年盛大に行われ、各国から多くの人たちが参加する。大牟田国の長の娘である命は昨年も招待されたのだが、体調がすぐれないために参加することが出来なかったのだ。そのこと命は残念に思っており、台与たちが訪ねるたびに「今年は参加したいなぁ」と漏らしていたのだ。

「でも台与ちゃんは忙しいんじゃないの？」

「あぁ、大丈夫大丈夫。私がやるのはせいぜい舞程度だし、後は師匠が何とかするでしょ。」

そう言って台与が冗談っぽく笑うと、命は可笑しそうにクスクスと笑った。

「卑弥呼様の弟子なのに、台与ちゃんっておかしいよね。」

「ん？やっぱ変？」

「ううん。その方が台与ちゃんらしいし、私は好きだよ。」

そう言って命は二コリと笑う。上品で育ちの良さが滲み出ているその笑顔。台与は自分が絶対に出せないであろうその笑顔をかわいいと思った。

「ありがと。」

だからこそ、台与は短くそう返すことしか出来なかった。照れ臭く、そして命の笑顔は直視するには眩しくて目を逸らす。そうしている

うちに、命はスクッと立ち上がると部屋を出ようと扉を開けた。

「お腹空いてない？今、何か持ってくるね。」

そう言い残し、命は扉を開けて外へ出る。その瞬間、外から別の女性の声が聞こえた。

「命様！そういったことは我ら下々の者にお任せください！」

「でも、私のお友達だから。」

「いいえ！それでも命様はお部屋でゆっくりされていていいんです！お呼びくだされば すぐに参りますので！」

そのやり取りを聞くだけで台与は命の表情が手に取るようにわかり、思わずクスクスと笑ってしまう。命の性格だ。自分で家事でもしようとところを女中に見つけられ、怒られているのだろう。困ったように笑いながら女中の声に押される姿は想像に難しくなかった。

「怒られちゃった。」

案の定困ったように笑いながら命は部屋に戻ってきた。それを台与

は笑って迎える。そう言えば、来るたびに同じ光景を見ていた気がする。自分から家事や接待をしようとした命が女中に怒られ、困ったような笑みで戻ってくる。命らしい光景に台与はクスクスと笑ってしまう。

「どうかしたの？」

「いいや、別に。」

首を傾げて命は再び台与の前に座る。そこから二人は他愛のない世間話を始めた。命はもっぱら家のことだ。父親が過保護だ、女中の皆がなかなか家事をさせてくれない。家にいる時間が長いこともあり、不満は次々に漏れてくる。台与は卑弥呼に怒られたことや、邪馬台国の最近の様子、依人のこと。特に依人のことは話題に尽きない。お互いによく知っている友人だからだろうか。自然と会話は弾んだ。

命？（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

命？

「それで依人がね。」

どのくらい時間が経っただろうか。その言葉からどんどん話題が出てくる。
笑ったり、怒ったり、話をするたびに色々な感情湧き上がる。そんな会話がどれほど続いただろうか。ようやく一息ついたところで、命がクスリと笑った。

「台与ちゃんって、依人君の話をする時、本当に楽しそうだよね。」

「え？」

「いっつも二人だし、何か妬けちゃうかな。」

「な、何言ってんのよ！別に依人は幼馴染っていうか・・・」

顔が一気に熱くなるのを感じる。何でそんな感情になっているのかはわからない。ただ照れ臭く、たまらなく恥ずかしいのだけは理解できた。

「いいなぁ台与ちゃん。傍にあんないい人がいるなんて。」

「だから依人はそんなんじゃ・・・」

「じゃあ嫌い？」

「う・・・」

命の追い打ちに台与は言葉に詰まってしまう。ニヤニヤと笑う命。たまらなく恥ずかしい感情が台与を包んでいく。別に依人を好きとか嫌いという感情で見たことはない。傍にいるのが当然というか、何と言うか。時々ムカッとすることもあるけど、基本いいヤツで、一緒にいてて飽きないというか。

「あらら、台与ちゃん固まっちゃった。」

命が苦笑するのも台与は気付かない。台与の思考は完全にグルグルと周り、ショートしてしまっていた。
そんな時、扉をトントンと叩く音が響いた。

「命。依人だけど入っていいか？」

「あら、依人君。うん、入っていいよ。」

依人。その名前の響きに台与の胸はドクンと高鳴る。それと同時に頭で考えていたことが全て吹き飛んでしまった。

「うわぁぁぁぁぁ！」

思わず素っ頓狂な声が飛び出る。それと同時に台与は立ち上がり、ガシッと扉を押さえつけた。

「あれ？開かないぞ？」

「帰れ。」

顔が真っ赤になっているのが自分でもわかる。もしこれを依人に見られたら。それを想像するだけで恥ずかしさが胸から溢れ出しそうだった。「は？」と意味がわからないという声を依人は上げる。その声が再び台与の頭に火を付けた。

「帰れって言ったら帰れってことよバカ！」

「ちょ、台与か？何があったんだよ！」

「うるさい、このバカ！」

「いや、意味わかんないから！とりあえず落ち着け。な、会って話を・・・」

「開けんな！開けたらぶっ殺すから！」

「いやいや、何でなんだよ。ってか命！いるんなら台与を止めてくれよ！」

「何も聞こえなーい。」

「ちょ、命さん？ホント頼むから！」

そんなやりとりの中、突然扉がガタリと音を立てて外れた。

「うぉ？」

バランスを失い倒れそうになる依人。倒れまいと手をバタつかせるも、周りに掴むものはない。さすがにマズイと台与は思い、その体を支えようとする。その時だった。

ムニャリ。

その瞬間、台与を未知の感覚が襲った。ムニャリ。胸に感じたそれが何を意味しているのか、台与は理解できなかった。ゆっくりと自分の胸に目をやる。そして確認した。自分の胸を何者かの手が鷲掴みにしているのを。それを恐ろしいほど冷静に台与は理解した。そう。それ自体なら単なる事象だ。腕が胸を掴んでいる。それだけだ。では誰の手が？台与の目がその腕を辿る。まっすぐ、ズラッと腕を辿る。そして見た。その先にあるものを。

「へ？」

「あ・・・」

その腕の主と目が合う。それは台与のよく知る人物だ。それが誰か理解した瞬間、台与は自分の顔に火が灯るのを感じた。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「ちょ、待て！これは事故で・・・」

「このバカぁぁぁぁ！」

台与は勢いのまま依人の顔を思い切り殴る。すると「ぶっ！」という醜い音を立てて依人の体は部屋の外へ吹き飛んでいった。それでも台与の気持ちは治まらない。顔は熱く、胸は苦しい。恥ずかしさが頂点に達し、穴があれば入って蓋まで閉めてしまいたいくらいだった。

「台与ちゃん・・・」

「ひぁ！」

肩を叩かれ、台与は素っ頓狂な声を上げて振り返る。そこには苦笑を浮かべた命の姿があった。

「とりあえず、後で依人くんに謝っといた方がいいよ。」

「あ・・・」

そこでようやく台与は正気に戻った。正気に戻った台与の前に広がっているのは、壊れた扉。苦笑する命。そして大の字になってのびている依人の姿だった。

愉快な食卓（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

愉快な食卓

「いや、だからゴメンって。」

「依人くん。台与ちゃんも反省してるからさ。そろそろ機嫌直してよ。」

台与と命の言葉を無視し、依人は無言のまま口に放り込む。
命の家。その見事な大広間では台与たちの歓迎の宴が催されていた。とは言っても、有力者たちが集まって盛大に開かれているものではない。家の主である命の父とその召使が数名いるだけのこじんまりとしたものだ。床には毛皮が各々の席に敷かれ、円を描くように並んでいる。そうした並びの食卓では普通会話に花が咲くものだが、今回は違った。明らかに機嫌の悪い依人に気を使ってか、あまり会話が進まないのだ。

「依人殿。このような美人二人に話しかけられて無視とは、男児として如何なものかな？」

台与たちの様子を気遣ってか、命の父が依人に声をかける。すると依人は持っていた器の中身を一気に口に掻き込み、フッと一息ついた。

「あぁ、悪かったな。別に命は気にすることないさ。あれは命じゃ

どうにもできなかった。」

そう言って依人は命に微笑みかけると、器を置いた。

「で、体の調子はいいのか？その分だと調子いいみたいだけど。」

「あ、うん。お陰様で。」

「そっか。じゃあ今年の収穫祭は来れそうだな。今年は連合の数も増えたし、いつも以上に盛大な祭りになるぞ。」

そう言って依人は嬉しそうに笑う。

「叔父殿。この飯は美味しいですね。いやぁ、毎回ご馳走になって申し訳ないです。」

「あ、あぁ。それは別に構わんよ。」

命の父が苦笑する。それに構わず依人は豪快に、大げさとも言えるくらいに笑ってみせた。

「ちょっと、私は無視？」

たまらず台与は依人を睨みつける。しかし依人は視線をプイと逸らしてそれを無視した。

「おじさんだって言ってるでしょ。女の子が頭下げてんのに、それを無視するって男としてどうなのよ？」

「俺はあんなことで人の顔面をブン殴るヤツを女とは思ってないんでね。」

「それは、アンタが・・・」

そこまで言って台与は黙りこんでしまう。あの自分の胸を掴まれた感覚が戻ってきて、恥ずかしくなったからだった。ましてや相手が依人だ。思い出すだけで逃げ出したくなるほどだった。

「ハッハッハハ！そういうことか！」

突然、豪快な笑い声が場を包む。笑い声の主は命の父だった。楽しそうに、ニヤニヤと台与と依人を見比べると、手を叩いて再び笑い始めた。

「依人殿。それは誇るべきものだぞ。」

「な！」

声を上げたのは二人同時だった。気がつけば、周りの召使いたちも何が起きたのかを悟ったようで、ニヤニヤとした笑みで二人を見つめていた。

「依人殿も幸せですなぁ。このように美人な方が相手となれば、男冥利に尽きるというものでしょう。」

男の召使いの一人が声を上げる。

「台与殿も嫌というわけではないでしょう。依人殿ならばなかなかの男児ではありませんか。」

今度は女中の一人が可笑しそうに声を上げる。その言葉に再び台与は顔が一気に熱くなるのを感じ、そのまま俯いてしまった。

「いや、皆、何か勘違いを・・・」

「依人殿。照れなくてもいいぞ。しかし何で言ってくれなかった？命も、私には教えておいて欲しかったぞ。」

「えっと、お父様。何か勘違いをされてるのでは・・・」

命が困ったような視線を父に送る。しかし、父は「はて」と首を傾げるのみだった。

「あの、叔父殿。叔父殿には俺たちがどういう関係に見えてるんですか？」

依人がそう訊ねると、命の父はキョトンとして召使いたちと顔を見合わせる。そして確認するようにニヤリと笑みを浮かべた。

「どういうって、あれだろ？二人は男と女の関係になったと・・・」

「はぁぁぁぁぁぁ？」

今度は命を加えた3人分の声が響く。どこをどうすればそんな勘違いになるのか、台与には意味がわからなかった。ただひたすらに恥ずかしく、この場を去ってしまいたい。そんな衝動に駆られるも、それは隣の命によって阻まれる。仕方なく恥ずかしさに耐えて、命はその場でじっと小さく丸まった。

「なんだ、違うのか？」

「いや、そもそもそんな考えになる意味がわからないんですが・・・」

「だってなぁ、男が素っ気なくて女が顔真っ赤にしてる様子なんて見たら・・・なぁ？」

「てっきりそういう関係になったのかと。」

命の父と召使いはそう言ってお互いの顔を見合わせると可笑しそうに笑う。

「なんだ、違うんですか。」

女中はガッカリしたようにため息をつく。

「でも、だとしたら何で台与殿が依人殿を殴る必要があったんだ？」

「あぁ、それは・・・」

マズイ。台与は依人の反応に本能的にそう感じた。しかし、そう感じた時には既に遅い。続く言葉が依人の口から出てしまっていた。

「ちょっとした不可抗力で俺の手が台与の胸を掴んじゃったんですよ。そしてら、台与が顔真っ赤にして俺の顔面殴ってきて・・・」

終わった。恥ずかしさが身を包む。同情か、命が台与の肩を叩く。一瞬凍りつく場。

「それだけ？」

「はい、それだけ。」

命の父と依人の短いやり取りが交わされる。一拍、再び場が沈黙に包まれる。そして次の瞬間だった。

「ハッハッハッハッハ！」

誰からともなく笑い始め、場は一気に笑いの渦が巻きあがった。

「まったく、台与殿は乙女ですなぁ！」

「初々しいのもほどがあるというか・・・」

「依人殿！羨ましい！」

皆がそれぞれに囃したてる。そのたびに台与は自分の顔から火山が噴火するような感覚に襲われた。恥ずかしい。逃げたい。そんな感覚が台与を包む。しかし、それは出来なかった。恥ずかしさで足が竦み、まともに頭が働かないからだ。今はただ、その恥ずかしさを受け止めて、顔が燃え上がるのを為すすべなく受け止めることしかできなかった。

「何だみんな。別にそんな嬉しいもんじゃないけどな。揉みごたえなんてあってないようなもんだったし・・・」

その瞬間、その言葉が台与の中で何かを呼び起こした。恥ずかしさとは違う何か。恥ずかしさとは別の熱さが台与を包み始めていた。

「依人くん、ゴメン。さすがにそれは庇えないよ。」

命が依人の肩を叩く。キョトンとして周りを依人は見渡す。そこは既に笑いなどない。皆、一様に静まり返って気まずそうに依人を見

つめていた。

「そうだな。今宵の宴はこれまでにしよう。皆、片づけてくれ。命、お前も手伝いなさい。」

「はい、お父様。」

命の父でさえ気まずそうに周りに指示を出し始める。召使いたちは何とも言えない表情で片づけを始めると、あっという間に食器の類はそこから消えた。そのまま召使いたちも姿を消す。命と父もいつの間にかどこかへ行ったようだ。

「なんなんだ一体・・・」

依人は頭を掻いて困惑した表情を浮かべる。めでたいことに、この男は未だに自分のしでかしたことに気付いてはいなかった。自分の発言が一人の夜叉を目覚めさせたことに・・・

「依人。何か言い残すことは？」

「は？」

「揉みごたえがなくて悪かったわね！」

腹の底から溢れる不満を思い切り叫び、台与は依人の頬を思い切り平手で殴った。

「痛っ！何すんだ！」

「うっさい！こればっかりは本気で許さない！」

ポカンとする依人を台与は再び殴りつける。今度は平手ではない、拳を握っての一撃だ。さすがに効いたのか、依人は殴りつけられた頬を押さえて台与を睨みつける。しかし、所詮は人の睨み。修羅のごとく怒りに燃えている台与にそんなものは何も効果を見せなかった。

「さぁ、言い残すことはない？」

「ちょ、ちょっと待て。一体俺が何を・・・」

ようやくその怒りの大きさに気付いたのか、依人は説得しようとする。だが、既にそんなものでは止まらないところまで台与は達していた。

「死ね！このバカ！変態！」

台与の叫び声と、依人の断末魔の叫びが響く。その夜、何が起きたのかを住人たちは知らない。ただ、翌朝ボロボロになった依人が発見されただけで、命を含めた住人たちは何も詮索しようとしなかった。

微かな兆候（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

微かな兆候

「それじゃ、お世話になりました。」

「いえいえ、いつでもいらしてください。」

台与のお礼に命の父は笑顔で答える。

「じゃあ台与ちゃん。今度は収穫祭で会おうね。」

「うん。絶対来てよね。また体調が悪いとか言ったら押しかけてやるから。」

「ハハハ。そうならないように気を付けるよ。」

そう言って命は苦笑すると、周りの侍女たちも吊られて笑い出した。命の父も笑っている。本当に温かい家族だ。台与は少し羨ましく思った。

「おーい。準備できたぞー。」

馬車を引きながら依人が姿を現す。その荷台には積荷がこれでもかというくらいに積み込まれていた。その横には台与の馬を引く男もいる。確か預り所の主人だっただろうか。恰幅のよい男は愛想笑いを浮かべながら手綱を台与に差し出した。

「ありがと。」

「いえいえ、台与様にはいつもお世話になっておりますので。」

そう言って男は一礼する。台与はそれを一瞥すると、再び命たちを振り返った。

「それじゃ、私たちは行くから。」

「うん。気を付けてね。」

「命も、体を大事にな。」

「依人君も、台与ちゃんを怒らせないようにね。」

そう言って命は悪戯っぽく笑う。反対に依人は気まずそうに苦笑すると、台与をゆっくりと見た。台与はそれが気に入らず、プイとそっぽを向いてやることにした。

「ハッハッハ！依人殿も女性の扱いはまだまだですな。」

豪快に命の父は笑うと、周りも再び笑い出す。ついには台与まで可笑しくなって笑ってしまった。

「はいはい。俺が悪かったよ。」

観念したように依人も苦笑する。そんな笑顔に混じって、いつの間にか、市の方から活気ある声が聞こえ始めていた。朝の市が始まった合図だ。そろそろ出発の時間が迫っていた。

「それじゃ、名残惜しいけどまたね。」

「うん。それじゃ、またね。」

笑顔で言って、台与も馬に跨ると、そのまま馬を歩かせた。見送りに手を振る皆に返事をしながら、台与は帰り道を進んでいく。その瞬間だった。何かが台与の頭に引っかかった。

「どうした？」

依人が不審そうに訊ねるも、台与はそれに答えることができなった。無視したわけではない。ただ、この感覚を表現する言葉が見つからなかったのだ。哀愁、迷い、不安、恐怖。近い言葉は浮かぶが、それを表現するには正しくないように思える。ただ、気分のいいものではない。そんな感覚が台与の身を包んでいた。

「ううん。何でもない。」

しかし、確証が持てない以上は何も言うことができない。台与は自分の感覚が杞憂であることを願いながら、馬をさらに進めた。

違和感との帰還（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

違和感との帰還

木々が晴れ、夕日が瞳に突き刺さる。すると、眼下には畑や倉、そして立派な建物が並ぶ国が見えた。日が暮れ始めるころ、台与と依人の二人はようやく邪馬台国に到着した。

「日が暮れる前でよかったな。夜になったらヤバかったしな。」

「そうね。」

「何だよ、まだ怒ってんのか？」

「違うわよ。何か疲れちゃっただけ。」

実際、疲れは溜まっていた。日中ずっと馬に乗りっぱなしで腰は痛んでいたし、体の気だるさもある。しかし、それ以上に大牟田国を出てからの違和感が気になって仕方がなく、どうしても依人の言葉を空返事してしまっていた。

そうしているうちに、馬は台与たちを邪馬台国の門まで連れて行っていた。門から警備の者が駆け寄ってくる。台与の立場を考えれば当然か。一刻も早く無事を確認したいのだろう。おそらく隊長格だった男が直々に迎えに来ていた。

「依人。および台与の二名、ただいま帰りました。」

「御苦労。台与様に怪我などないな？」

「大丈夫よ。それより、早く開けてちょうだい。疲れちゃった。」

門を警備する隊長に気だるそうに台与は言い放つ。どうやら無事ということを確認して安心したのか、隊長はホッと胸を撫で下ろすと、門を警備する部下たちに合図を送った。

ギギギと大きな音を立てて門が開く。そして、警備をする兵士たちは一様に頭を下げた。

「さすが台与様だねぇ。」

「殴るわよ？」

「おお怖い怖い。」

からかうように言った依人を睨みつけると、台与は門をくぐった。

大牟田国ほどではないが、人の数も多い。市もあれば国の中に田畑も広がっている、総合的に栄えているのがここ邪馬台国だ。しばらく道を歩けば、女王卑弥呼の力を誇示するように建てられた一際大きな屋敷が見えてくる。このあたりまで来ると、田畑や市はもう見かけない。兵士の居住区や、作物を納める倉など、国を形作るのに重要な施設が並び始めている。

「じゃ、俺はこの荷物を納めないといけねぇから。」

倉が並ぶ場所に差し掛かると、依人はそう言って手を振った。

「うん。それじゃ、また明日。」

「おう。」

短い会話を交わすと、依人の姿は倉の方向へ消えていった。

ついに一人になった台与は、帰りを急ぐ。だんだんと空は暗くなり始めている。そろそろ戻らなければ卑弥呼に何と言われるだろうか。そう考えると憂鬱になってきた。

馬を預け、台与は屋敷へと急ぐ。幸い、まだ預り所の主人はそこにおり、たいした時間をかけることなく馬を預けることができた。そこからは自分の足だ。そう遠くない距離を台与は走る。その甲斐あ

ってか、日が沈み切る前には屋敷へ帰ることはできた。

「ふぅ、間に合ったぁ。」

屋敷に駆け込んだせいか、若干息切れしながら台与は呟く。特に時間を言われているわけではないが、日没後に帰宅すれば卑弥呼に何か言われるのは間違いない。幸い、日はまだ茜色のまま山に乗っかっている。そのことを確認すると、台与はふうとため息をついた。

「台与様、お帰りなさいませ。」

「あぁ、ただいま。」

ちょうど通りかかった卑弥呼の侍女がペコリと頭を下げる。

「ちょうどようございました。卑弥呼様がお探しでしたよ。」

「はぁ。やっぱりだめか。」

「卑弥呼様はお部屋でお待ちです。それでは。」

再び頭を下げて侍女は足早に去っていく。その背中を見送りながら、台与はふと頭に浮かんだことがあった。

―師匠ならこの感覚の正体がわかるかも・・・

大牟田国を出た時から感じていた奇妙な感覚。形容できないこの感覚でも師である卑弥呼なら分かるのではないか。そう考えると、これから受けるであろう小言も受けてやろうという気になってきた。

もう一度台与は外を見る。山に乗っかっていた太陽は、既にその姿を隠していた。

振り払うために（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

振り払うために

卑弥呼の部屋は屋敷の一番奥の離れにある。邪馬台国で最も大きな屋敷の奥だ。屋敷の中とは思えないほどの距離を歩かなければならない。何のためかわからない部屋も多く、初めて来た人間は必ず迷うことになる。そんな屋敷も台与のように住んでいる者にとっては庭のようなものだ。迷いなく、どんどんと奥に進んでいく。屋敷の奥までいくと、一旦裏庭に出る。その庭の端にあるのが卑弥呼の住む離れだ。離れといっても、邪馬台国の民が暮らす家とさほど変わりがないほどに大きい。そんな離れの扉を台与はトントンと叩いた。

「どなた？」

「台与です。ただいま戻りました。」

「入りなさい。」

卑弥呼の言うままに、台与は扉を開く。そこには外とは異質の世界が広がっていた。

おびただしい数の祭具が部屋の壁を覆い、部屋の奥には装飾を施した神棚が鎮座している。床には上等な毛皮が敷かれ、明らかに外とは違う雰囲気を醸し出していた。

そんな部屋の神棚に向かい、台与に背中を向けて座っているのが卑

弥呼だ。黒く長い髪を床に付けたまま、卑弥呼は神棚の上に飾られていた鏡を取った。

「台与ちゃん。何か私に言うことがあるんじゃないかしら？」

「えっと、日没までにはちゃんと屋敷に戻ったんですが・・・」

「そんなことじゃないわ。」

台与の言葉を打ち切るように短く言い放ち、卑弥呼は台与に体を向けた。

「もっと大事なこと、台与ちゃんは感じたんじゃない？」

その言葉に台与は固まった。卑弥呼が言っていることが、台与の心を見とおしていたからだ。おそらく卑弥呼が言っているのは今感じている奇妙な感覚のことなのだろう。だが、それをなぜ卑弥呼が知っているのか。誰にも話していないことを卑弥呼が知っている。薄々は感じていたが、改めて台与は思った。やはり卑弥呼は得体が知れないと。

「私にもはっきりとわからないんですが・・・」

隠しても無駄だ。それにどうせ話すつもりだったことだ。台与はゆっくりとさの感覚について語り始めた。

大牟田国を出た時の感覚。哀愁、迷い、不安、恐怖。それらが織り交ざったような、決してよいものではない感覚のことを。そして、それが未だに消えないことを。

一通り話し終わった後も卑弥呼は口を開かない。目を閉じ、何か考えるように沈黙していた。

沈黙が二人の間を流れる。台与はこの沈黙を破ることなどできない。ただただ、卑弥呼が口を開くのをじっと待った。

「何か、よくないことが起きるかもしれないわね。」

ゆっくりと卑弥呼は言う。

「よくないことって、何ですか？」

「それは私にもわからないわ。私だって、今の台与ちゃんの話で初めて大牟田国のことを知ったんだもの。」

そう言って、卑弥呼はもう一度台与の瞳をじっと見つめた。

「ちょっと付いて来なさい。」

そう言って卑弥呼はスッと立ち上がると、台与を残して外へ出る。その突然のことに慌てて台与は卑弥呼を追いかけた。

離れから再び屋敷に戻り、いくつもの角を曲がる。そこは住んでいる台与さえあまり知らない場所だった。いくつもの使われていない部屋を見回しながら歩いているうちに、ようやく卑弥呼は一つの装飾の刻まれた扉の前で足を止めた。

「ここは？」

そう訊ねる台与に答えず、卑弥呼はその扉を開ける。他の扉とは構造が違うのか、重そうなゴゴゴという音を立てて扉は開く。その瞬間、その中の光景を見た台与は息を飲んだ。

「これって・・・」

部屋の中に並んでいたのは、先ほどの卑弥呼の部屋と同じように壁にびっしりと並んだ祭具。そして、神棚への道を作るように建てられた松明だった。換気用に開けられた穴からは外の月明かりが申し訳程度に差し込んでいるものの、中は薄暗い。そんな部屋に卑弥呼は躊躇いなく入ると、慣れた手つきで松明に火を付け始めた。

すると、あっという間に薄暗かった部屋は茜色の明かりに包まれた。

「台与ちゃん。この部屋を貸してあげるわ。そこで神様の声に耳を傾けるのよ。」

いつもとは違う、キッとした目を向け、卑弥呼は台与に言う。

「瞑想ですか・・・」

「大牟田国で起きることはわからないわ。戦争か、大火事か、それとも疫病、自然災害かもしれない。一応何人かの兵は送るけど、何が起きるのかがわからないことには、私たちは大きく動けない。台与ちゃん。今こそ神様の声に耳を傾けるのよ。私じゃなくて台与ちゃんが異変を感じたということは、今、これから起きることを知ることができるのは台与ちゃんしかいないということ。この意味、わかる？」

「はい。」

短く台与は返事をする。そして胸を手で押さえた。

卑弥呼が言っているのは、台与だけが大牟田国を救えるということだ。そして、神様は台与に大牟田国の運命を託したということだ。そう考えると、胸がキュッと痛む。しかし、台与の心に迷いはなかった。

「私、やります。きっと大牟田国を救ってみせます。」

まっすぐに卑弥呼を見つめる。すると、卑弥呼も大きく頷いた。

「私も出来る限りのことはするわ。だから、台与ちゃんは出来るだけ正確に神様の声に耳を傾けるのよ。」

「はい。やってみせます。大牟田国は、命は私が絶対に助けてみせます。」

頭をよぎるのは命や大牟田国の人たちの笑顔。それらすべてが自分の頑張りにかかっている。そう考えると、胸は締め付けられるように痛み、手は震える。しかし、台与はその手で思い切り自分の頬を叩きつけた。

―しっかりしろ、台与。

自分に言い聞かせ、台与は大きく深呼吸する。今自分がやるべきことは怯えたり、不安になることではない。精神を集中し、できるだけ多くの情報を得ること。それは台与にしかできないことなのだ。台与はそのことを必死に自分に言い聞かせた。

「じゃあ台与ちゃん。門は一旦閉めるけど、見張りの兵を置いてお

くわ。何かわかったら、すぐに兵に知らせて頂戴。」

「はい。」

力強く返事をし、台与はその場に座り込み、早速精神を集中させる。これまで何度も修行した成果もあってか、あっという間に台与の周りから無駄な音が消える。そんな状態だったからだろうか。卑弥呼が閉めた扉の音は、入った時よりも大きく感じた。

見ていない真実（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

見ていない真実

この部屋に閉じこもってどのくらい経っただろうか。既に時間の感覚はない。

そして、この部屋もほとんど変わらない。変わったといえば、整然と並んだ松明がいくつか消えたくらいだ。ただ、定期的に運ばれてくる食事の回数から計算すれば二日は経っている。普通の人間ならば、こんな閉塞的な空間では参ってしまってもおかしくはない。

そんな空間でも台与は必至に精神を集中させ続けた。それは、まさに精神が擦り切れるまでと形容するのが正しいほどの行為だった。ただ一つの思い「皆を救いたい」だけを胸に持ち続け、台与は精神を集中させた。

「お願い。皆を助けたいの。だから、私に教えて。これから起こることを。」

もう何度願ったことだろうか。この二日間、同じ願いを顔も知らない神に願い続けていた。しかし、どれも結果は同じ。何か嫌な感じがするだけで、肝心の内容が見えてこなかった。しかし、この時だけは違った。

「うっ！」

突然、頭の中に無数の光景が流れる。台与はその衝撃に思わず短い悲鳴を上げた。膨大な量が頭に流れ込んでくる不快感は形容しがたいもので、台与は飛びそうになる意識を唇を噛んで必死に押さえつける。

これを逃したらもう次はない。そう思い、必死に台与は耐える。

すると、だんだんと意識は安定し、頭に浮かぶ光景も鮮明なものとなってきた。

「何よ・・・これ・・・」

その鮮明になってきた光景に、思わず台与は頭を押さえる。その光景は決して明るいものではない。悲惨という言葉も生ぬるいほどの光景だった。

燃え上がる家。串刺しにされた人間の死体。道にゴミのように散乱した四肢。身ぐるみを剥がされ、焦点を失った目でそれを見つめる女たち。

例えるなら地獄。そのあまりに残酷な光景に、台与は吐き気と眩暈でその場に倒れ込んだ。

それでも、頭にはいくつもの光景が流れ込む。それと同時に、いくつもの単語が頭に浮かんでは消えていった。「殺戮」「略奪」「強姦」「大牟田国」「壊滅」「火」「死」。どれもプラスなものはない。そして、頭に流れ込んできた光景。そこから台与が取るべき行動は一つしかなかった。

「誰か！誰か返事をして！」

扉に駆け寄り、台与は思い切り叫ぶ。叫ぶだけではない、力の限り扉を叩いた。しかし、向こうからは何も返事がない。卑弥呼は見張りの兵を置いていくと言ったにも関わらずだ。

「ねぇ！誰か！誰もいないの！」

扉に手を掛け、開こうとするも、扉はびくともしない。外から鍵でもかけられているのだろうか。扉は一向に動く気配を見せようとはしなかった。

「開けてよ！何でよ！何で誰も返事しないのよ！」

力の限り扉を叩く。しかし、返事は一向にない。そのことが台与を焦らせる。

「わかったんだよ！これから起こること！今なら間に合うんだ！助けられるんだ！」

扉を叩く音だけが虚しく部屋に響く。いつの間にか、台与は自分の視界が揺らいでいるのに気がついた。

泣いたのなんていつ以来なのか。記憶に無かった涙が次々に溢れる。しかし、泣いている暇などない。台与は必死に叫び、扉を叩き続けた。

「お、おい。これヤバいんじゃないか？」

「このままだと台与様、本気で壊れてしまうぞ。」

突然、扉の向こうから男の声が聞こえてくる。言葉の内容は理解できない。しかしその声は、台与にとって光のように思えた。

「誰かいるの？お願い！ここを開けて！師匠を呼んで！」

必死に台与は叫ぶ。しかし、なぜか扉の向こうからは返事がない。ただ、何か会話をしているだけだ。何かがおかしい。錯乱している台与の頭でもそれだけは理解できた。そして、台与は扉を叩きながら、扉に耳を当てた。

「とにかく、卑弥呼様にお伝えするんだ。我らではどうにもならん。」

「そ、そうだな。」

男たちの会話は焦りの色を含んでいた。しかし、それ以上に不審なのが内容だ。

男たちは確かに台与の声を聞いている。それなのに、それを無視し、卑弥呼の指示を待っている。これはどういうことなのだろうか。卑弥呼は何かあれば兵士に言えと言った。それにも関わらずだ。

「どうしたの？騒がしいわね。」

「卑弥呼様！」

女性の声。台与にとって聞き慣れた卑弥呼の声が扉の向こうから聞こえる。これをチャンスと思い、台与はもう一度力を込めて扉を叩き叫んだ。

「お願い！出して！」

しかし、扉は開かない。卑弥呼でさえ無視しているのか。そんな信じたくない考えが台与の頭をよぎり、再び扉に耳を付けた。

「そう。御苦労さま。後は私がやるから、あなたたちは万が一に備えて待機していて頂戴。」

理解できない言葉だった。卑弥呼は一体何を話しているのか。そんな台与の思いなど関係なしに、扉はギギギと音を立てて開いた。

「どうしたの、台与ちゃん。そんな怖い顔して。」

さっきまでの言葉など無かったかのように卑弥呼は笑顔を浮かべて言う。そのあまりにも自然な笑顔に、台与はゾッとした。本能的に俯き、台与は口を開く。

「見たんです。大牟田国がどこかに攻められて壊滅するのを。たくさんの人が死んで、家が燃えて、とにかく地獄みたいな光景が広がっていて・・・」

「他には何が見えた？」

「文字が。死とか、略奪とか、とにかく恐ろしい文字の羅列が。」

「他には？もっと具体的なこととか、それえより先のことは？」

しつこく訊ねてくる卑弥呼。おかしい。何かがおかしい。そう感じ、台与は顔を上げて卑弥呼を見た。

「ねぇ、他には？何か見えたんじゃない？」

そこにいたのは、今まで見たことのない血走った眼で台与を見つめる卑弥呼の姿だった。何に興奮しているのかなどわからない。ギラギラと目を輝かせ、台与の肩を掴む。その力は、痛いとも思えるほど強かった。

「それだけです！師匠、それより早く大牟田国を救わないと！今ならまだ間に合います。早く助けにいきましょう！」

その肩を振り払い、台与は訴える。しかし、卑弥呼の反応は台与が期待するものではなかった。がっかりしたと言わんばかりにため息をついて今度は憐れみのような目を台与に向けた。

「その様子だと、本当にそれだけしかわからなかったみたいね。」

「え？」

「まぁいいわ。今までこんなに台与ちゃんがやる気を出したこともなかったし、いい経験にはなったかもね。」

そう言って卑弥呼は苦笑する。その言っている言葉を台与は理解で

きなかった。自分が必死で訴えているのに、一つの国が壊滅の危機に瀕しているのに、この卑弥呼の余裕は何なのだろうか。台与には全く理解できなかった。

「いい加減にしてください！こうしている間にも、大牟田国の壊滅は迫ってきてるんですよ！もしかしたら、今すぐに助けに行かないと間に合わないかもしれない！時間なんてわからなかったんですよ！」

苛立ちを抑えきれず、台与は叫ぶ。しかし、卑弥呼はそんな台与を見てクスリと笑った。

「明後日の夕刻。日が落ち始めるのと同時に、大牟田国に日向国の軍勢が攻め入るわ。その圧倒的な兵力差と突然の強襲に大牟田国の人々はろくに反撃できない。逃げようにも包囲された状態ではそれも叶わない。そんな国で、日向国の兵たちは好き放題に暴れるでしょうね。」

つらつらと、まるで決まったこと事実を述べるように卑弥呼は言う。

その言葉の意味を台与は理解することができなかった。

見ていない真実（後書き）

間があいてすいません。卒論め・・・

明日は更新します

裏切られた願い（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

裏切られた願い

「何を・・・言ってるんですか？」

大牟田国が滅びる。平然と卑弥呼が言ったその言葉が信じられず、台与は茫然として言う。すると卑弥呼は再びクスッと笑って答えた。

「台与ちゃんが見ることの出来なかった未来よ。」

「なら何故！そこまでわかっているのに助けようとしないんですか！」

「本当に、何も見えていないのね。」

食いかかるように叫ぶ台与を見て、残念そうに卑弥呼はため息をついた。

「その後、日向国のあまりに乱暴な行為に周辺諸国は日向国に制裁を加えることで意思を統一する。その中心となったのは邪馬台国。邪馬台国を中心にした連合軍は見事日向国を滅ぼすことに成功する。これがきっかけとなり、小競り合いが続いていた各国は邪馬台国という大きな国としなることを決意。こうして小競り合いは消え、安定した国家の下で民は長く平和に暮らすことができる。」

目を閉じ、嬉しそうな笑みを浮かべながら卑弥呼は言う。そして、そんな卑弥呼を見て、台与は全て理解した。

「ふざけるな！」

卑弥呼に向けて台与は叫ぶ。頭の中で何かが弾けるのを感じる。体も熱い。まるで火が胸の底から燃え上がってくるような感覚だった。

しかし、卑弥呼はキョトンとした顔で台与を見ると、困ったように苦笑した。

「台与ちゃん。気持ちはわかるわ。お友達を失う辛さもわかる。だけど、これは運命なの。私たちが平和に暮らすためには避けて通れない道。大牟田国はその尊い犠牲に・・・」

「何わけわかんないこと言ってんのよ！」

声の限り、胸から湧き出る勢いのまま台与は叫ぶと、卑弥呼の胸倉を掴み上げる。しかし、卑弥呼は全く動じない。まっすぐに台与を見つめたまま、なおも続けた。

「これは神様が決めた運命なのよ。神様が私たちをよりよい道へ進

めるように導いてくれているの。そう。これは救いなのよ。」

「目の前の命を捨てることの何が救いよ！わかってるの？国一つが死ぬのよ！」

「それでも、これは避けられない。いや、避けてはいけないの。私たちがよりよい未来を歩むためにも・・・」

「そんなの私たちの理屈よ！大牟田国の人は、命は、その未来を歩めないのに！それの何が救いなのよ！」

「彼女たちも今は苦しいかもしれない。だけど、誇りに思うハズよ。後の世の平和のために死に、礎となるのだから。」

「そんな勝手なこと！」

全身の思いを台与は叫ぶ。既に血管すべてから火が噴きでそうなほどに体は熱くなっている。それほどに必死の思いで台与は卑弥呼に思いをぶつけた。

「あなたも巫女なら受け止めなさい。」

しかし、卑弥呼の口から出たのは冷たい言葉だった。その言葉が台与を押さえつけていた最後の綱を切った。

「くそっ！」

掴んでいた胸倉を離し、台与は床を蹴って出口へ走る。これ以上卑弥呼と話しても何も変わらない。それならばせめて自分が。自分が大牟田国へ伝えれば間に合う。そう思い、台与は扉へ急いだ。しかし、その思いが扉を抜けることはなかった。

「どこへ行こうというのですか？」

低い声が耳に響き、台与は足を止める。扉の前には屈強な兵士が二人立ちはだかっていた。おそらく卑弥呼に命じられてこの部屋の前を警備していた兵士なのだろう。先ほどのやり取りなど想定内と言わんばかりに落ち着いた様子で台与の行く手を阻んでいた。

「どきなさい。これは命令よ。」

「申し訳ありません。我らが遣えるのは卑弥呼様です。台与様の命令を聞くことは・・・」

「あっそ！」

短いやり取りを強制的に打ち切り、台与は再び床を蹴り、扉の前に立っていた兵士に体当たりする。兵士といえども、鎧も槍も装備していない兵士だ。女の体でも奇襲を仕掛ければ十分に効果はある。思わぬ攻撃だったのか、兵士はそのまま「ぐえっ」と声を上げてそのまま倒れる。一方の台与は兵士の体がクッションとなって何一つ体に異常はない。

台与はそのまま再び立ち上がると、倒れた兵士に見向きもせずに床を蹴る。外にまではさすがに包囲網は広がっていないハズだ。外に出れば希望はある。そんな思いに後押しされて台与は急いだ。

しかし、台与の体がそれ以上進むことはなかった。

「ぐっ！」

腕を掴まれ、引っ張られた肩がガクンと鳴る。その痛みで力も抜け、台与の体は一気に部屋の中へ引き込まれた。

「あまり手を焼かせないでください。我らも台与様を傷つけたくはないのですぞ。」

羽交い絞めにされ、体の自由は完全に奪われる。どんなにもがいても、がっしりと体を掴んだ男の太い腕はびくともしなかった。

「離してよ！私が行かないとみんなが！」

「わかってください！これも国のためです！」

「ふざけんな！離せ！離せぇぇぇぇぇぇ！」

力の限り暴れる。しかし、少女の体と屈強な兵士の体では最初から勝負など付いている。そんなに叫ぼうと暴れようとびくともしない。

そんな台与の横を卑弥呼は何もなかったかのように横切り、部屋を出る。その冷たい横顔を台与はもう師として見ることなどできなかった。

卑弥呼が部屋を出ると同時に、台与の体は突然宙に浮いた。それが投げ飛ばされたからだとわかったのは、床に叩きつけられ、激痛が全身に走ってからだ。

全身が痺れ、思うように立ち上がれない。その隙に残った兵士も部屋を出て扉を閉めた。

ズシン。再び思い音を立て、扉が閉まる。その厚さ以上に外との距離を離す扉が、台与に絶望の二文字を押し付ける。しかし、それを振り払うように台与は扉に駆け寄ると、再び大声で叫びながら扉を力一杯に叩いた。

「開けろ！開けてよ！」

扉を叩く拳が痛む。それでも台与は扉を叩き続けた。

「みんなが！命が死んじゃう！お願い！開けてよ！」

叫ぶ声がだんだんと途切れる。咳き込み、視界もぼやけてきた。そこで台与は自分が泣いているのだと気がついた。いつ以来かの涙を拭い、台与は叫び続ける。その声が誰かに伝わればいい。そう念じて叫んだ。

「開けて！早くしないと命が！命がぁぁぁぁぁ！」

しかし、そんな叫びもだんだんと咳きや嗚咽が邪魔をして途切れてくる。伝えなくては駄目なのに。この真実を伝えられるのは自分だけなのに。涙が溢れてそれを邪魔をする。

叫んでも、叫んでも、誰も返事をしない。何もできない。そんな絶望が台与から涙を溢れさせる。焦れば焦るほど。頑張れば頑張るほどに涙は溢れ、台与の邪魔をした。

「お願い・・・だから。」

ついに台与は扉の前で膝を付く。もう立つことなどできないほどに、体は絶望でいっぱいになってしまっていた。

代わりに溢れるのは涙と嗚咽。もう言葉を出すことはできなかった。

「うっ・・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

溢れてくる感情のまま台与は叫んだ。それはもう声ではない。自分でも止められない感情は声ではない叫びとなり、台与の口から溢れ出た。絶望、怒り、悲しみ、後悔。それらすべてが叫びとなって響く。

しかし、その叫びに耳を貸すものは誰一人としていなかった。

光（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

光

自分の見た光景と、卑弥呼の予言。それを照らし合わせると、大牟田国の滅亡は間違いない事実だ。しかし、それを知っているのに何もできない。そう思うと、食欲など湧いてくるハズもない。むしろ、このまま何も食べないことで死ぬことができれば。そうとまで思っていた。

「命・・・みんな・・・」

頭に浮かぶのは楽しかった日々。依人と大牟田国に行ったのはつい最近のことだ。しかし、今ではそれが遠い昔のように感じてしまう。命の家で食事をしたこと。依人と喧嘩したこと。それを見た皆が笑ってからかったこと。何よりもそんな日々が尊く感じた。約束もしたのだ。また収穫祭で会うということも。こんな日が来るなんて思いもしなかったから、笑顔で別れたのだ。また会えると言って。

「ごめんなさい・・・」

振り絞るように台与は呟く。もう何度目の謝罪かわからない。無論許されないことはわかっている。それでも、台与は振り絞るようにして呟き続けた。呟くたびに、胸が縄で締め付けられていくような感覚に襲われる。まるでそれは、何もできない台与に対する罰のようだった。だからこそ、台与は呟き続けた。そうすることで、できるだけ多くの罰を受けられるようにと。

「依人・・・」

転がっていた体を抱き抱えるようにして丸め、台与はその名前を呼んだ。師である卑弥呼に裏切られ、兵士たちも卑弥呼に従っている。そんな中で唯一味方だと信じられるのが依人だった。

あの日、一緒に笑い合った依人なら。そう信じてその名前を呼んだ。言葉には魂が宿ると聞いたことがある。ならば名前を呼んでいれば何か伝わるのではないだろうか。普段は鼻で笑いそうなことだが、今はそれにすがった。

空気を入れる小さな窓から夕日が差し込む。ふと台与は自分の横に積まれた食事の数を見た。手をつけることなく放置された食事は全部で五つ。閉じ込められた日から計算すると二日目の夕方だ。つまり、大牟田国に滅亡が訪れる時間だった。

「くっそぉぉぉぉ！」

最後の力を振り絞り、台与は立ち上がると扉を思い切り叩きつける。もう拳の感覚はとっくにない。見れば真っ赤に腫れあがり、ところどころ血も出はじめてている。それでも台与は叩き続けた。その時だった。

ギィィィ。

鈍い音を立てて扉が突然開いた。もう何年も見ていなかった扉の向

こうの景色、そして新鮮な空気が鼻腔を刺激する。しかし、何よりも驚いたのは、その向こうにいた人物だった。

「台与！何があった！」

その顔を見た瞬間、台与はその人物の胸に飛び込み顔を埋めた。懐かしい匂い、そして暖かさ。それらすべてが台与の心を包んでいく。その安心感からか、枯れたと思っていた涙が一気に溢れ出した。

「依人！依人！私！私、もうどうしたらいいか・・・」

何度もその名前を叫んだ。それに応えるように依人は台与の体を強く抱きしめる。

しかし、その温もりを長く感じることも台与には許されない。窓からは見える夕焼けは沈みつつある。時間が迫っていた。

「とりあえず聞かせろ。何があったんだ？」

台与の体を離し、依人が訊ねる。それに台与は強く頷くと、全てを依人に話した。

焦る思い（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

焦る思い

「くそッ！ふざけんなよ！」

夜の邪馬台国を駆けながら依人は叫ぶ。その表情には今までにない怒りの色が窺えた。

台与の話を聞いた瞬間、依人は扉を思い切り殴りつけた。それは台与が今まで叩き続けたどの拳よりも大きく音を立てたので、一緒に入って来た兵士が宥めるほどだった。

「依人！外にある訓練場の馬を使え！あそこなら門をくぐらなくても馬を出せる！」

「できるのか？」

「あぁできるさ！そのために俺がいるんだろうが！」

そう言って、兵士の一人がニヤリと笑う。依人と一緒に入って来た二人の兵士は、台与の見たことのない顔だった。走りながら台与はキョトンと二人を見つめた。

「自己紹介がまだでしたね、台与様。僕は仁と言います。そしてこっちが・・・」

そんな台与の視線に気づいてか、兵士にしては小柄でどこか頼りなさの残る男が会釈し、もう片方の男を指差す。それに気付いたのか、男も振り向いて軽く会釈した。

「武です。よろしく」

仁とは対照的にまさに兵士というような屈強な体で武は言った。それに軽く台与も会釈で返す。本来ならここで自分も名乗るべきなのだが、そこまで気を回すことはできなかった。今はただ、大牟田国。いや、命の安否だけが台与の頭の全てだった。

「なぁ依人。いっそ台与様の予言ってやつを皆に伝えたらどうだ？」

「いや。それはキツイね。台与様の話が本当なら、卑弥呼様は大牟田国を見捨てるつもりだ。それに、台与様の警備をしていた兵士が全く耳を貸さなかったことから考えるに、軍の上はそれに同調してる。悔しいけど、この国じゃ卑弥呼様の言葉は絶対だからね」

武の意見を仁は否定する。台与も仁の意見に同意だった。

おそらく卑弥呼は万全を期してこの計画に臨んでいる。自分を閉じ込めた時の手際のよさも、あらかじめ計画していないと出来ないほどだった。だからこそ、今は自分たちが動くしかない。卑弥呼のイ

レギュラーであるハズの自分たちが動くしかないのだ。

「着いたぞ！」

見張りのいない裏門を抜け、依人が叫ぶ。台与の見たことのない抜け道を通った先にあったのは、邪馬台国を囲う柵からポツンと離れた場所にある馬小屋だった。

「ここは・・・」

「新米兵士が訓練する訓練場だ。もっとも、ここの馬は年寄りで一線を引退した馬ばっかだけどな」

そう言って依人が苦笑する。

「それでも、大牟田国までなら何とか頑張ってくれるさ。仁、手伝え！」

「はいはい」

そう言って、二人は馬小屋の扉を開き、準備を始めた。こうなるとやはり二人は頼もしい。手慣れた手つきで馬を宥めると、手際よく

外へ連れ出すことに成功する。

「アイツら、馬の扱いは上手いんだよ」

得意げに依人は言うと、さらに続けた。

「二人ともいいヤツだよ。お前のこと相談したら、すぐに味方になってくれた。お前を助けられたのも、あの二人のおかげだ」

「うん。本当に感謝してる・・・」

短く、台与はそう答える。そうしているうちに、武と仁の二人は馬を小屋から出し、いつでも出せる準備を終えていた。

「依人！いつでも出せるぞ！」

「わかった！台与、お前はそっちを使え！」

「うん」

力強い依人の声に勇気づけられ、台与も強く頷く。不思議な気持ち

だった。さっきまで絶望していたのに、今ではもしかしたらの希望まで見えてきている。

—命、どうか無事でいて！

馬に跨り、台与は自分の胸をギュッと握りしめる。少しでも不安が拭えるように、ひたすら台与は祈り続けた。

滅びゆく国（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

滅びゆく国

その日、大牟田国はいつもと同じ時間が流れていた。

「お疲れさーん。調子はどうだい？」

「ぼちぼちだな。まぁもうすぐ秋の収穫も始まるし、忙しくはなるだろうよ。」

「違いない。どうだい？この後、家に来ないかい？」

「お、いいねぇ」

夕暮れに染まる市場では、商人たちが一日の成果を話し合っていた。

「ねぇ奥さん聞いてよ。家の旦那がさぁ」

「まぁまぁ」

商人たちの住まいでは、その妻たちが旦那の愚痴を漏らし合っていた。

「かぁちゃん。ご飯まだー？」

「もうちょっとだよ。父ちゃんが帰ってくるまで我慢しな」

ある家族は、もうすぐ始まるであろう幸せな夕飯を待っていた。誰しもがこれからいつもと同じ夜が訪れることを信じて疑っていなかった。こんな日々がいつまでも続いていくと、そう信じていた。そしてそれは、大牟田国の長の娘である命も同じだった。

「ねぇ、お父様。私、この調子なら収穫祭に行けるかな？」

「そうだな。最近は調子がいいみたいだから大丈夫だろう」

「本当？」

「あぁ。そのためにも、無理してどっか行ったりすんなよ」

「うん」

笑顔で命は頷く。父も笑顔で応えた。

昨年は体調を崩して参加できなかった収穫祭。それに今年は参加で

きると考えると、胸がウキウキしてくる。
台与や依人と何をして遊ぼうか。二人をからかうのも面白いかな。
そんな未来を命は想像していた。そして、それは必ず来るものと信じていた。

夜の闇が夕焼け色の太陽を覆い始める。間もなく夜が来る。大牟田国をぐるりと囲む柵を警備する兵士たちは、松明に火を灯し始めた。
そんな時だった。兵士たちは門にゆっくりと近づいてくる三人の男たちの姿を見た。

「止まれ」

人の出入りが活発な大牟田国だが、日が沈んでから入ってくるような人間は珍しい。二人の兵士が男たちを呼び止めた。

「ここに出入りしている商人ではないようだが、どこの者か？」

「へぇ。我々は旅の者です。実は盗賊に襲われ、命からがらにここまで逃げて来ました」

そう言って先頭に立っていた男が俯く。しかし、それを兵士は不審に思った。男たちの身なりは、黒いマントのようなもので姿をすっぽり隠すような、見るからに怪しい出で立ちだ。しかし、そのどこにも乱れた様子はない。盗賊から逃げたにしては様子がおかしかっ

た。

「その盗賊はどこにいる？」

そう兵士が訊ねた瞬間だった。黒いマントがバサッと宙を舞い、そこにはニヤリと笑った男の姿があった。

「ここにいるよ」

それが兵士の聞いた最後の言葉だった。マントを脱いだ男たちは瞬時に兵士の喉を剣で刈り斬る。真っ赤な血が周囲に飛散するのと、夜の闇から怒号が轟いたのは同時だった。

「な、なんだ！」

物見やぐらから兵が顔を出す。見張りの兵も仲間を目の前で殺されて黙ってなどいない。三人の男たちを取り囲もうと次々に出て来た。しかし、彼らは気付いていなかった。取り囲まれていたのは自分たちだったことに。

「ぐあっ！」「ぎゃッ！」「うげぁ！」

次の瞬間、夜の闇から次々に矢が飛来し、飛び出してきた兵たちを次々と射抜く。兵士たちが敵は三人ではなかったことに気付いた時にはもう遅い。雨のように降り注いだ矢あは、瞬く間に見張りの兵たちを片っ端から射抜いていった。

「まずは第一段階終了か」

夜の闇から、次々と武装した兵たちが姿を現す。その中で、一人だく馬に跨った男がニヤリと笑った。

「戦羅様。包囲が完了しました」

「よしよし。逃げられたら厄介だからな」

駆け寄る兵にそう言うと、満足そうに戦羅と呼ばれた男は頷く。そして、自らが率いる兵たちを見渡した。

「野郎ども！手筈どうりだ。一人たりとも生かして返すな！あるものは片っ端から奪え！食料でも財宝でも女でもかまわねぇぞ。とにかく、好きにやりな！」

戦羅が高らかに叫ぶと、兵士たちが一斉に「おおお」と声を上げる。それに呼応するかのように大牟田国の周りからも声が上がる。それ

はまるで終末の合図のように国を包んだ。

引き裂かれるもの（前書き）

この小説はフィクションです。
古代を舞台にしたファンタジーと思ってもらった方が差し支えないと思います。

魔法などが登場するわけではありませんが、この時代ではありえない大型市場や、金銭という感覚。騎馬の普及など、日本史を学んだ人には奇妙に感じる部分が多々あると思いますが、どうかご了承ください。

引き裂かれるもの

「国長！敵の軍は我が国を既に囲っています！」

「敵は門を突破後、次々に略奪を敢行。兵たちの対処が追い付きません！」

次々に兵たちが屋敷に駆け込み、怒号にも似た叫び声で報告する。その様子に命はどうしようもない恐怖を覚えた。

今日は父の仕事も早く終わり、早くから召使いの人たちと食事をとっていた。命にしてみれば、いつもと変わらない食卓。いや、それは誰もが特別にも思わなかった光景だっただろう。しかしそれは、突然駆けこんできた兵の叫び声であっけなく変わり果てた。

門が所属不明の兵たちの手で破られた。

兵も何が起きているのかわからない様子でそれだけ叫んだ。そこからは次々に報告が飛び込んできた。それらはまるで、真っ白な紙に墨をかけていくように次々に命の日常を塗り替えていった。召使いたちは慌ただしくそれぞれの持ち場に急ぎ、父も兵たちに指示を飛ばす。誰も命に構う暇など持っていないのか、ポツンと取り残された命はその場で次々に報告されてくる国の崩壊を聞いていた。次第に大きくなる怒号や悲鳴。建物が崩れ落ちるような音。あまりにも突然の事態に命は、ただ震えることしかできないでいた。

「命、ちょっと来なさい」

国長である父が突然自分の名前を呼ぶ。見たことのないような思いつめた表情に、命はドキリとするも、逆らうことなどできず父の傍に寄った。

「命。お前は逃げなさい」

「え？」

「この国はもう駄目だ。もともと周りの国に保護されてきた国だ。防衛能力なんてものはないんだ。でも、抜け道なら何か所かある。お前はその道から・・・」

「お父様は？」

命には父の言葉が理解できなかった。かろうじでわかったのは逃げなくてはいけないこと。しかし、それ以上に理解が追い付かない。なぜ逃げなければいけないのか。いつもと変わらない日が過ぎていたのになぜ。なぜこんなことになっているのか。なぜ父がこんなにも思いつめた表情で話しているのか。そんなことなどわかるわけがなかった。

「私はこの国の長だ。最後まで残る義務がある」

父の言葉に命は俯く。そんな命の頭を父は優しく撫で、優しく微笑んだ。

「大丈夫だ。私も命が逃げたのを確認したら逃げる。そうすればまた会えるさ」

「はい・・・」

短く命は頷く。しかし、父の約束は果たされないというのは理解していた。父は自分たちを犠牲にして娘や多くの民を逃がすつもりだ。娘である命にはわかる。父はそういう人なのだから。

だからこそ、父の覚悟を無駄にしてはいけない。聞きわけよく、父の命令に従う。それが自分のできる最善手ということは命も理解していた。

そう決断すれば頭も動きだす。今、国が滅ぼうとしていること。時折聞こえる断末魔であろう悲鳴や女性の悲鳴。子供の泣き叫ぶ声。外は想像を絶する光景が広がっていることも理解した。そして、そんな中を自分たちは突破しなければならないことも。

不安で胸が痛む。しかし、今わがままなど言っていられない。父の覚悟に沿うこと。それが娘の義務だと自分に言い聞かせ、奮い立たせる。

父が兵士を3人ほど呼びつけ、指示を出す。どうやら自分の護衛として付かせるようだ。のこり少なくなった兵士を割くことに申し訳なくも感じたが、今はそれに甘えるしかない。覚悟の表情を浮かべた兵士たちにペコリと頭を下げ、命は父を見た。

「ではお父様。お達者で」

「あぁ、命。絶対に逃げ切るのだぞ」

短い会話を交わし、兵士に促されるままに命は部屋を後にする。これが別れということも理解している。しかし今は泣いている暇などなかった。国の中心にある屋敷から脱出するためにも、今は少しでも時間を無駄にしてはいけない。自然と足は速くなり、兵士たちに囲まれるようにして屋敷の裏門をくぐった。

外は夜だというのに明るい。町の家や店が燃えているからなのだろう。改めて命は目の前の現実を思い知らされた。

一秒でも早く国を抜け出す。何としても生き残る。そのためにも急ごう。

言い聞かせるように命は足を速める。幸いにも屋敷の前に兵の姿は見えない。逃げるなら今しかない。命たちは走った。自分が今どこを走っているのかなどは分かっていない。今はただ護衛の兵士に必死に付いて走るだけだった。

どれだけ走ったのか。生まれてから今日までの全てを合わせても足りない距離わ走ったように命は思った。しかし、兵士たちは息ひとつ切らしていないことからそんなに距離は走っていないようだった。周りが暑い。それは国の出口に近付いている証拠でもあった。

そして、惨劇の現場に近づいていることも意味していた。そんな中、突然兵士たちが足を止めた。

「嘘だろ・・・」

護衛に付いていた兵が信じられないとばかりに漏らす。それは命も同じだった。

命の目に飛び込んできたのは、目を覆いたくなるような現実だった。燃え盛る家や店が夜の闇を照らす。そこには多くの死体が転がっている。兵士だけではない。商人や女、子供まで。皆例外なく血だらけで、まるでゴミのように転がっている。その中でも女性の死体は凄惨を極めている。多くの死体が衣一つまとっていない丸裸のままで転がっている。その理由を命は考えたくもなかった。

そして、何よりも絶望に付きつける光景がそこにはあった。

屋敷を囲うように大勢の男たちが闊歩している。その誰もが剣や槍を持った兵だ。その兵たちは見るからに大牟田国の兵ではない。なにか獲物を探すかのように男たちはぎらぎらとした目をしていた。

「きゃあぁぁぁぁぁぁ」

女性の悲鳴が耳をつんざく。今まで遠くに聞こえていた悲鳴が、今度はすぐ近くで上がっている。それが何を意味しているのかなど考えるまでもない。

「やめてぇぇぇぇ！いやあぁぁぁぁぁぁ！」

その悲鳴に命は耳を塞ごうとする。しかし、次の瞬間、そんなことをしている場合ではなかったことを思い知らされた。

「命様。申し訳ありません・・・」

護衛の兵士がそう言って剣を構える。それにならって残りの兵士たちも剣を構え始めた。

目の前には明らかに大牟田国の兵とは違う兵たちが並び、ニヤニヤと命たちを見ていた。その数は軽く命たちを圧倒している。そう。ついに出会ってしまったのだ。敵の兵士たちと。振り返れば、そこにも同じような兵士たちがいる。逃げ場はもうなかった。

じりじりとその包囲した輪が狭まる。恐怖が胸を支配する。震えることすら忘れ、命は近寄ってくる兵たちをじっと見ていた。

「我々が時間を稼ぎます。その隙に命様は逃げてください」

突然護衛の兵士が口を開き目配せをする。そこには唯一包囲から外れた横道があった。幸いにも人影はない。

護衛の兵士は覚悟の表情で命を見る。共に逃げようなど言えなかった。

「ありがとうございます、みなさん」

「いいですよ。それより、早く逃げてください。我々の分まで！」

そう言って護衛の兵士たちは怒号とともに走りだす。命にもう迷っている時間はない。振り返りもせず、ただひたすらに横道を走り抜けた。

汚されていく体

背中から怒号が聞こえる。断末魔や悲鳴。おおよそ人が一生で聞くそれの何倍もの量を背中に受けながら、命は走った。息が切れる。足もどう動かしているのかわからない。自分がどこへ向かって走っているのかもわからない。それでも命は走った。

「なんで？なんでなの？」

走っている最中、何度も命は声に出す。今自分が置かれている状況は誰に訴えればいいのか。この理不尽な運命を誰に訴えればいいのか。そんなことはわからない。ただ、叫ばずにはいられなかった。恨まずにはいられなかった。

本当なら今頃は家族と温かい食事を囲んでいる時間だ。優しい父と、愉快な使用人たち。人並みよりは贅沢な暮しだったが、それでも望むものはそんな温かい日々だけだった。欲張ってもいなし、誰かを傷つけたわけでもない。毎日静かに暮らせればいい。それだけを望んできたのだ。

それなのに、この仕打ちは何だ。家族はバラバラ。国の人たちは大勢死んだ。自分を守ってくれた兵たちも今はもうどうなったかわからない。なぜ。なぜ自分がこんな目に。命は不自然に明るい夜空を見上げて叫んだ。

「なんでなのよ！」

そんな時だった。ジャリッと砂を蹴る音が聞こえてきた。それも一人の音ではない。大勢の足が近づいてくる音だ。咄嗟に命は周りに隠れる場所がないか見回す。そんな時だった。

「おぅおぅお譲ちゃん。こんなところで何してるのかなぁ？」

その声に背中がゾクゾクと震える。聞くだけでわかる。好意でかけているような声ではない。どこかからかうような、野太い声。振り返ったそこには、道を塞ぐように並ぶ男たちの姿があった。

「おいおい。こりゃ上物だぞ」

足音がついに追い付き、その先頭に立っていた男が舌舐めずりするような声を上げる。

道は一本道。挟むように男たちは命を囲む。命は頭が真っ白になった。逃げ場がない。自分を囲んでいるのは国を襲った男たち。その事実だけで恐怖で体が震える。

「ちょっと幼いか」

「いや、俺はむしろこの方が好みだな」

「震えちゃってるよ。かわいいねぇ」

「お前、さっき別の女とヤッてたろ」

「あぁ。ありゃハズレだったよ。全然かわいくなかったし、すぐ気絶しやがった」

「そう考えたら、このお譲ちゃんはいいねぇ」

品定めするように命を見ながら、男たちは囲いを小さくしていく。男たちの目はどれも例外なく好奇に満ちてギラギラとしている。まるで目で舐められているような不快感が命を襲う。しかし、命は後ずさりするだけで何もできない。男たちに勇ましく立ち向かうことも、機転を利かせて逃げることもできない。ただ恐怖に震え、目の前のものから少しでも離れようとすることしか出来ないでいた。

ゴツン。背中が道に並んだ家の壁にぶつかる。それを合図にしたのか、男たちが一斉に命に飛びかかった。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

今までにだしたことのない声を上げて命は抵抗する。しかし、所詮は少女の、それも病弱で滅多に外に出ることのなかった少女の力だ。屈強な男の兵士の力の前では無いに等しい抵抗だった。先頭に出てきた坊主頭の男は簡単に地面に組み伏せられると、その痛みを感じる前に男の手が命の胸を鷲掴みにする。

「やだぁぁぁぁ！やめてぇぇぇぇ！」

必死に命はもがく。足をじたばたさせ、手あたりしだいに男の体を殴りつけた。

「うるせぇぞコラァ！」

男が叫んだのと、頬に激痛が走ったのはほぼ同時だった。

殴られた。

そう脳が知覚した瞬間、今までの何倍もの恐怖が体を包む。それは命の体をがんじがらめにし、動くことを許さない。

「痛い目会いたくなかったらじっとしてろや。すぐ気持ちよくなっからよぉ」

ニヤリと男が下品な笑みを浮かべる。その言葉を信じるわけがない。

実際に男が体に触れるだけで、まるで虫がそこを張っているかのような不快感が体に走る。それでも、命は男に従うしかなかった。それは恐怖感。不快感よりも恐怖感が感情を支配し、体が全く動かないのだ。

「おい、まどろっこしいぞ。早くしろよ」

「そうだな」

後ろに控えていた男が急かすと、坊主頭の男はニヤリと笑って命の服を思い切り引き裂いた。

今まで晒したことのない肌が外の空気に晒され、男たちの歓喜の声が辺りに響く。その声の一つ一つがまるで蛇のように命の体を嬲っていく。

早く終わって。

命は誰へとなく祈った。しかし、無常にも男たちはその祈りさえも犯すように命の体を舐めまわすように見つめた。

「案外、胸はあるんだな」

「見ろよこの体。真っ白だぜ」

「ホント、遊んでないっていうヤツか。もしかして、どっかのお譲さまだったりして」

「ちげぇねぇ！こりゃ大当たりじゃねぇか」

男たちが歓喜に満ちた顔で命を見つめる。そんな中、坊主頭の男が命の露わになった胸に突然顔を近づけた。

「もう我慢できねぇ！先に貰うぞ！」

興奮に染まった声で言うと、そのまま下を命の胸に這わせる。

「や、やだぁ・・・」

恐怖で声が漏れる。しかし、そんなのお構いなしに男は荒い息を漏らしながらその動きを止めようとしなかった。

その行為は命にとって恐怖の他の何でもなかった。男に舐められた場所から体が腐っていくような、自分のものでなくなっていくような恐怖。しかし、がっしりと他の男たちに足や腕を押さえつけられた命の体はそれを拒むことができない。できるのは、必死に唇を噛み、この時が過ぎるまで我慢することだけだった。

どれだけ時間が経っただろうか。少なくとも命にとっては気の遠くなるような時間が過ぎ去った頃、男はふぅと舌の動きを止めて、体を起こした。

「さて、ここからが本番だぜ」

「え？」

頭が恐怖からか全く働かない。朦朧とした意識の中、命は自分の足が男たちに強引に広げられるのを感じた。

「さぁ、大人になる時間だ」

その言葉が、まるで針のように命の頭に突き刺さる。その意味が命の頭を刺激し、一気に思考が戻ってくる。

「やめて！お願い、何でもするから！それだけは・・・」

ようやく動くようになった手足を思い切り動かし、必死に抵抗する。その間、何度も顔を殴られ、髪を引っ張られる。しかし、激痛などに構ってなどいられない。目の前の男がしようとしていることに比べれば、それくらいの痛さなど何度でも我慢してみせる。これだけ

は守らなければいけない。本能と感情がそう叫んでいた。しかし、そんな命の抵抗も男の興奮を呼び起こすだけだったのか、男たちはニヤニヤと笑いながら命の体を押さえつける。外気に当たった股が意識とは無関係に震える。

「さぁ、観念しな」

坊主頭の男がニヤリと笑って下腹部を近づけてくる。その醜悪さに命は思わず目を閉じた。

―神様、助けて・・・

歯を食いしばり、祈る。しかし、助けなどがくるはずもない。そうしているうちに何か熱いものが股に当たり、恐怖と羞恥心と悔しさで胸が震える。しかし男たちに押さえつけられた体は全く動かない。男が強引に何かを押し付けてくる。その正体など考えたくもない。しかし、それは確実に命に侵入しようと迫ってくる。その恐怖に思い切り命は歯を食いしばった。

「そら！処女喪失の瞬間だ！」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁっぁぁぁ！」

激痛とともに命は悲鳴を上げる。今起きていることが信じられない。しかし、うっすらと目を開けた先には自分めがけて夢中になって腰を振る坊主頭の男の姿があった。

「いやぁ・・・　やだよぉ・・・」

激痛とともに目から涙が溢れる。信じたくない現実に頭が真っ白になっていく。命の意識は、まるで流した涙に溶けていくように暗い闇に沈んでいった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2893y/

神が消えた日

2011年12月15日23時51分発行